２０２４年４月の総評に代えて

○林　　桂○

●音無　早矢（埼玉県　25歳）

パキケファロサウルスが好き
春一番

【評】パキケファロサウルスは石頭恐竜で、大きな石頭を持っている。この石頭の用途にまだ定説はないらしい。何か愛すべき形態の謎に、好き勝手な自説が浮かんで楽しめそうだ。「好き」とは、そういうことだろう。

●さいう●（石川県　19歳）

さんずいの
ように
途切れたちんもくへ
きみは母音のといきをもらす

【評】「さんずいの／ように」が途切れ途切れの沈黙の比喩となっている。氵を比喩とする視点が面白い。三つの点の間隙に意味を付与する。

●氷丸（茨城県　20歳）●

肉体の窮屈感　日永

【評】私たちは、すべてを肉体に閉じ込めて生きていることを、改めて感じさせてくれる。「窮屈」が至言。「日永」は肉体の外をゆうゆうと流れている。

●杢いう子（佐賀県　40歳）

砂利音のきれいな更地薄い月

【評】「きれいな」の意味を深掘りした作品。「更地」になった目新しさと、それ以前の風景が失われた感覚、それがもたらす感懐を、すっぽり包んでいる言葉だ。

●田崎森太（東京都　73歳）●

花朧ガンマナイフで剪る腫瘍

【評】「花朧」との取り合わせの妙。照射の感覚と重ねているのだろうか。

●辻村陽翔（北海道　20歳）

レタスの葉を洗う雫はうつくしい
誰と生きなくても構わない

【評】「誰と生きなくても構わない」とずっと思っている訳ではない。「レタスの葉を洗う雫はうつくしい」と思った一瞬の思いである。生きている現在ただ今を肯定的に感じられた寂しい充実感であろうか。

●日下部　友奏（東京都　18歳）●

ルービックキューブ
　　きらきら
　抱卵期

【評】「きらきら」を「キ」の段に合わせているのは、韻律を意識してのことだろう。「ほうらんき」の「ら」は、「きらきら」の「ら」からかもしれない。殊更に韻を踏む箇所ではないので、韻律を聞く耳がいい人らしい。

●髙松　瞳（東京都　27歳）●

眠りから現に落ちて

夢の尾が
ラムネのように光に溶ける

【評】現から眠りに落ちるのが、一般的な感覚。私たちは現の住人であることを前提に考えているからだ。ここでは眠りから現に落ちている。眠りの住人なのだ。眠りの世界の夢の住人である。その名残が、現に光の尾を引いて残っている。

●常田　瑛子（山口県　37歳）●

両の手を器に桜、受け取って
あの世の底を日だまりにする

【評】二行目に飛躍があるが、掌の窪が「あの世の底」にも見えてくる。桜はあの世では日だまりか。

● TEN（北海道　40歳）●

眠れない夜が遠くを歩いている

【評】確かに寝付けないときの感覚はこんな感じだ。早く枕元にやってきて欲しいものだ。

●洋梨　またら（群馬県　16歳）●

気分だけラクダのまつげ春疾風

【評】砂漠地帯を生きるゆえの適応だろうが、ラクダのまつげは長くて美しい。春の疾風に煽られて、自身のまつげもラクダのように長く美しく感じられたというのだろう。何事も前向きに受け止めることから生まれるユーモアがいい。

●加那屋こあ（東京都　52歳）●

ぶらんこに月光
学校にうさぎ

【評】小学校のブランコには誰も居ず、月光が座っている。学校のウサギ小屋にはウサギの気配が動く。静かな夜だ。

●鈴木たなか（京都府　23歳）●

真っ白な一日などなく
壁の蜘蛛見ながら食べる作りおき

【評】大なり小なり、一日を生きることは、心が動くことである。「真っ白な一日」などないのだ。一日の終える一室に心を整

える侘しさ。

●浪花　小槙（東京都　18歳）●

夜桜がポップコーンに見えている

【評】これは実見、実感の作品だろう。「ポップコーン」と言われ、自分が感じていたのはこんなことだったのだと教えられる。闇に浮かんだ白い花の塊は、こんなふうに見える。

●そらうた（長崎県　72歳）●

薬が増えてくる
歳ばっかりとってゆく
先が見えてきて
未練が深くなる

【評】老いてゆくことは「未練を深く」することだという。いろいろな老い方があるだろうが、これが一番の正直な実感かもしれない。